

今年で3年目!「子ども教育の魅力発見ツアー」 (オンリーワン・ハイスクール事業)

高校生に「子ども教育の魅力」を知ってもらうための事業、「子ども教育の魅力発見ツアー」(静岡県立磐田北高等学校との共催)は、今年で3年目を迎えました。今年は7月25日(火)、8月4日(金)、8月23日(水)に開催され、主催の磐田北高校だけでなく、磐田市内の他校の生徒も多数参加しました。また、全3回のツアーに複数回参加する高校生も少なくなく、本ツアーへの関心の高さがうかがわれました。

今年度の訪問先である富士見幼稚園、めいわ竜洋保育園、磐田市立竜洋東こども園では、園長先生の講話、先生方による「仕事のやりがい」のお話し、「質問コーナー」などの時間を設けていただきました。現場にいらっしゃる先生ならではの貴重なお話を聞くことができ、とても有意義な時間だったようです。また、子どもたちとの関わりの時間は、「とても楽しい!」と感じた一方で、難しさも経験したという声がありました。

また、午後の静岡産業大学のプログラムでは、学生による保育実習報告会やミニ講義に参加し、大学キャンパスの雰囲気を感じながら、保育・幼児教育の重要性や多様性について理解を深めました。

実施後のアンケートでは、「進路選択に役立ったか」、「こどもの保育・幼児教育について理解できたか」、「保育・幼児教育の仕事への関心が高まったか」の質問に対して、参加者のほぼ全員が「かなりできた(とても高まった)」「できた(高まった)」と肯定的な回答をし、本事業の目的が達成されたことが確かめられました。高校生は本ツアーに参加することによって子ども教育に対する関心をさらに深め、子どもと関わる仕事への意欲をより確かなものとしたようです。



子どもとふれ合いのひとつ



ミニ講義「食育」では一日の献立を考えました



ミニ講義「リトミック」



保育教諭による「仕事のやりがい」

学窓便り

～ 発達を促す手作りおもちゃ ～

本学の2年生は後期の「障がい児保育」で発達を促すおもちゃを製作しています。

題材の条件は、①遊ぶことで発達を促せること、②安全・衛生面に配慮すること、③安価で入手しやすい身近な材料を用いること、の3点です。製作の過程では、「こう工夫すればこんな育ちにつながる」「こんな風な遊び方もできる」という学生の発見があります。

昨年度はコロナ禍で現場へのお届けができず大学図書館への展示(写真)でしたが、今年度は、こども発達支援センターの子どもたちに学生たちがお届けする予定です。



News Letter 3

ニュースレター Vol.3
2023年11月7日発行



保育研究センター

〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

TEL 0538-37-0191(代表) FAX 0538-36-8800 <https://www.ssu.ac.jp>

保育士等キャリアアップ研修を開催しました

本年度より、磐田市より委託を受け、保育士等キャリアアップ研修(磐田市・袋井市・掛川市・菊川市・森町4市1町連携事業)を本学磐田キャンパスにて開催することになりました。本研修は、平成29年に厚生労働省が、保育士のキャリアアップと処遇改善とともにリーダー的職員を育成することを目的として制定されました。8つの専門分野に分かれており、1分野あたり15時間の受講が必要となります。本年度は「乳児保育」と「保護者支援・子育て支援」の2分野について開催しました。今後本年を含めた3か年で7分野の研修を開催する予定です。

「乳児保育」は酒井範子特任講師が、「保護者支援・子育て支援」は日隈美代子講師が担当しました。受講者は、4市1町の保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育事業及び認可外保育施設等に勤務する職員の皆さんです。

保育所等の現場では、なかなか他の園の様子について知る機会がありません。そのため、できるだけグループワーク等を多く取り入れたり、実際の事例を取り上げたりして、単なる座学にとどまらない学びができるよう工夫しました。教室は毎回とても熱気に包まれていました。

受講者のレポートから

- 自分の市や市以外の取り組みの説明もあり、自分の市や近隣の市は子育てしやすい環境であることを学んだ。子育てが初めての人や市に初めて来た人は特に不安であるため、不安な気持ちを受け止めながらも自ら発信していきたいと感じた。
- 最初のアイスブレイクで行なった「得意なこと」の発表の際、各自のそれらはある意味「社会資源」であり、インフォーマルな人的資源と考えられるとのこと、社会資源が行政機関や制度化されているものだけでなく見直してみると自分たちができる子育て支援の幅も広がってくるのだと感じました。
- 講義の中で「保育者にとって困った親は、困っていることが多い」と言う先生からのお話を聞いて、その様な保護者こそ、丁寧に支援して行かなければいけないと改めて感じた。
- 小規模園ということで、地域での子育て支援の役割と考えたときに課題や難しさが先行しがちであったが、「地域=大規模」と捉え過ぎていたことに気づき、自園だからできる役割もあると考えるきっかけとなった。



日隈美代子講師



酒井範子講師



令和5年保育士等キャリアアップ研修プログラム

研修分野「A乳児保育」	開催日	研修分野「F保護者支援・子育て支援」	開催日
乳児保育の意義	7/29(土)	保護者支援・子育て支援の意義	7/30(日)
乳児保育の環境	8/5(土)	保護者に対する相談援助	7/30(日)
乳児への適切な関わり	8/11(金)	地域における子育て支援	8/6(日)
乳児の発達に応じた保育内容	8/26(土)	虐待予防	8/11(金)
乳児保育の指導計画、記録及び評価	9/3(日)	関係機関との連携、地域資源の活用	8/6(日)



こんな授業をしています！

「保育内容(言葉)での学びを保育実習に活かす」

酒井範子特任講師

専門分野:保育内容(言葉・環境)、乳幼児保育

本学の保育士養成課程必修科目、保育内容「言葉」では、子どもの言葉の発達における保育士の果たす役割の重要性について学びます。

絵本の読み聞かせの大切さの理解と技術の習得

絵本は、糸へんに会うに本と書きます。絵本は「糸で出会いを結んでくれる本」人と人との出会いを結んでくれるということです。小説もマンガも、ひとりで読むものですが、絵本は読み手がいて、聞き手がいる「読み聞かせる」ことが重要です。絵本を通して読み手と聞き手が繋がり、「ふれあい」や「関わり」というものを大切に作る時間になることを理解し、技術を習得します。

児童文化財の製作とプレゼン技術

保育の中で活用する様々な児童文化財の製作に挑戦し、自分の保育の幅を広げるための引き出しを多くします。さらに、指導案をもとにした模擬保育を学生が評価し合うことで、プレゼン技術の改善に役立てます。



パネルシアター

保育の場で実践

保育実習に臨んだ学生は、毎日様々な場面で読み聞かせの実践をし、その楽しさと豊かさを実感します。また、部分実習の導入として自作のペーパーサークルなどを演じ、子どもの反応に触れることで大きな手ごたえを感じます。保育のやりがいを実感する瞬間です。

保育内容「言葉」の学修内容が、保育実習に活かされ、優れた保育士育成へと繋がります。学生が製作した作品を保育の中で活用したパネルシアターとスケッチブックシアターをご紹介します。



スケッチブックシアター



こんな研究をしています！

手指の発育発達と母指中手指節(MP)関節過伸展症

佐藤寛子准教授

専門分野:保育内容(造形表現)、感性教育

フランスの哲学者ベルクソンは、人をホモ・ファーベル(工作人)と定義しました。手指は私たちが手にする最も身近で精巧な道具です。人間は手指で道具をつくり、操作し、創造的で文化的な生活を営んできました。

幼児がハサミの操作を体得していく過程を観察すると、母指MP関節(図1)が反った状態=過伸展(図2)になる時期があります。ハサミの操作を体得する過程で、切断しにくいものを切ろうとしたり、ハサミを大きく開こうとしたときです。手指の発育発達の途上であることから、筋の連携がうまくいかず、過伸展になってしまうのです。過伸展状態では十分に握力を発揮できません。そのためさらに力んでしまい、場合によっては母指MP関節に疼痛を生じることもあります。

しかし心配はいりません。ほとんどの幼児はこのような挑戦を繰り返しながら、次第に伸展からやや屈曲(掌側に曲がる状態)でのハサミ操作を体得していきます。もし就学前になっても過伸展状態のままの幼児がいたら保育者の出番です。

母指MP関節過伸展症は日常の手指活動において、当該関節に疼痛を生じ、手指活動が制限される症状です。ほとんどの罹患者は“困りごと”として本症を抱えたまま生活しています。保育者が将来困りごとを抱えて

しまうかもしれない子どもを認め、適切な援助をすることは、子どもたちの未来のQOLの向上に繋がります。私たちは、幼児の皆さん、保護者の方々、現場の保育者の先生方にご協力いただきながら、現在、効果的な援助方法を研究しています。

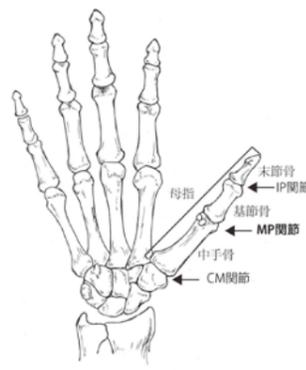


図1 手指の関節(成人の右手)

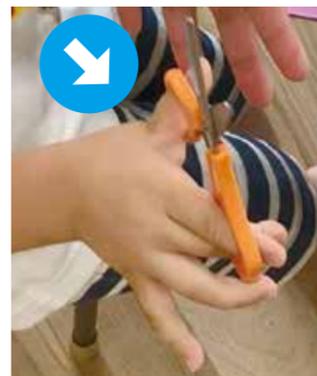


図2 ハサミを使う幼児(矢印部分が過伸展状態)

研究室訪問



宮地由紀子准教授

専門分野:社会福祉、障害福祉、地域福祉

今までの研究内容

これまでどのようなことに取り組んできましたか？
また、そのきっかけは？

地方自治体職員として勤務していたときに、携わっている仕事について感じた生活者の思いや疑問などから、一度違う立場で考えてみようと思ったことが研究のきっかけです。

これまで取り組んできた研究は、地方自治体における福祉政策、特に障がい児者に関わる制度やサービス、家族への支援についてです。

「全国発達障害者支援センター調査(2008)」では、発達障害者支援法が施行されたばかりで、センター機能として重要な地域支援ネットワークの構築が不十分であることがわかりました。地域における相談窓口や療育の場、就労の場などの地域資源の有無が、地方自治体としての福祉政策に大きく影響します。

今取り組んでいる研究内容

今取り組んでいることは何ですか？

今取り組んでいることは、地域の子どもの居場所づくり政策についてです。特に障がいの子どもの含めたインクルーシブな居場所をどのように確保していくのかについて調査研究を進めています。

障がいのある子どもの余暇や放課後の居場所政策についての取り組みは遅く、2001年から放課後児童クラブで専門的知識等を有する指導員を配置する補助制度が始まったものの限定的であり、2010年の障害者自立支援法・児童福祉法の改正により創設された放課後等デイサービスが居場所として急激に拡大してきました。

2017年に行った「障がい児の放課後等の居場所づくり施策に関する調査」においても、多くの利用があることがわかりました。

しかし、質の格差や地域社会との交流の希薄さなどの課題も多

く、単純に以前より障がい児の居場所が増えたとは言えない状況です。共に地域に暮らす子どもの居場所として、子どもの一般施策におけるインクルーシブな居場所づくりが必要だと考えています。

「インクルーシブな居場所を可能とする事業調査(2021)」として調査した児童館事業では、自由来館以外に「放課後児童クラブ」、「子どもの居場所の提供」、「その他の居場所事業」を実施している児童館で、その全ての事業において障がい児が利用していることがわかり、その可能性が示されました。この要因をさらに分析し、今後モデル的な取り組みができればいいなと思っています。

今関心のあること

今関心のあることは何ですか？

今年初めて「ヒューマンサービスマネジメント」についての授業を行いました。ヒューマンサービスとは、人が人に直接働きかけ、人の健康や福祉にかかわる職業で、医療、看護、保健、福祉、教育などのサービスを表しています。

私たちは、2020年からの新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による社会の変化を経験しました。働く時間や場所を「柔軟に調整できる業務」と「調整するのが困難な業務」があるという認識が広まり、エッセンシャルワーカー(essential worker)やクリティカルワーカー(critical worker)、「キーワーカー(key worker)」という言葉が生まれました。

このような職業に携わる人々のメンタルケアの必要性が一層高まっています。7月には実践的な取り組みとして、心理療法(コラージュ療法)が体験できる講座を始めました。授業内では取り入れていたが、ボランティア活動に関わっている方からの要望で体験講座を開催しました。さらに多くの方に体験していただけるように継続的な講座の開催を計画しています。



学生のコラージュ作品